

毛利梅園考

中 田 吉 信

当館所蔵の本草書のうちに、毛利元寿梅園なるものが自ら画く『梅園海石榴花譜』一帖・『梅園介譜』一帖・『梅園魚品図正』（『梅園魚譜』）三帖・『梅園禽譜』（『写生斎梅園禽譜』）一帖・『梅園菌譜』（『写生斎菌譜』）一帖・『梅園草木花譜』一七帖、計二四帖の画譜があり、これらは「梅園画譜」の名で一括され、所謂「別置書」として、貴重書室書庫に保管されている。いずれも著者の自筆稿本で、美麗で精緻な素晴らしい図譜である。

これとは別に、当館の伊藤文庫（伊藤圭介・伊藤篤太郎旧蔵書）のうちにも、写真斎梅園輯図『草木実譜 根類海草類』という四六丁の自筆稿本があり、これも押印から判断して、前掲の「梅園図譜」の著者と同一人の自筆稿本と思われる。

この「毛利元寿梅園」とはいかなる人物であろうか。近年になつて、周防・長門三十六万石の大名毛利家の一族で、右田（現・

防府市）邑主毛利房頭の子「毛利元寿」とする説が有力になつてきた。この説——以下「梅園・右田毛利説」と略称することにする——を始めて唱へたのは、筆者の推測では、元山口大学農学部教授の日野巖氏（一八九九—一九八五）と思われる。日野氏は、昭和三十一年、『毛利梅園菌譜』（防府 藤本作一）という一六頁の小冊子のなかで、「毛利梅園の略歴」として、

毛利元寿の素姓については、従来よくわからなかつたようであり、同時代に生活した伊藤圭介すらも誤り考えていた。錦窠翁筆筵誌、卷三、伊藤圭介所蔵の毛利梅園画帖頃の註には、伊藤圭介か田中芳男の筆かと思うが、その著者を幕臣写真斎梅園毛利元寿と記してある。

毛利元寿は、もとより幕臣ではなく、毛利家の一門右田毛利氏の第九代房頭の第二子である。（同書三頁）

と記し、以下『右田毛利譜録』（毛利文庫蔵）によつて、「毛利

元寿」の経歴を記している。それによると、元寿は毛利房頭の子、文化一二年(一八)七月二日の生まれ、幼名は武之允、長兄が早世したので、天保二年(三二)二月二三日、嫡子となり、同年一月三日に元服、藩主齊元は「元」の字を与えて、「元寿」と名づけた。天保五年(三九)正月から家政を執つたが、翌六年(四〇)七月五日、二十一歳の時に、病身という理由で、廃嫡され、萩の川上屋敷に転居、更に平安古川屋敷、松本屋敷と転じ、弘化三年(四六)に「讚岐」と改名、後にまた「九内」と改名、明治四年八月一九日に分家、同一五年(一八)六月二九日に六八歳で没した。法名は賢明院殿元寿日永大居士、萩の日蓮宗法華寺に葬られた。孫の毛利高一所有の系図には、明治一五年五月一九日の歿となつてゐるといふ。また吉田嘉蔬の『天野氏譜録』(明治二四年刊)によつて、廃嫡の理由は父子の不仲が原因であるとしてゐる。

日野氏はその後、『防長本草学及生物学史』(下関 山口大学農学部内日野巖先生還暦記念会 昭和三三年)においても、その六一頁から六五頁にかけて、「毛利元寿」についてほぼ同じようなことを記され、元寿の著した草木花譜や菌譜について、その正確な描写を高く評価してゐる。更に『防長本草学及生物学・農学年表』(徳山 マツノ書店 昭和五二年)でも、一八八二年(明治一五年)の欄で、同じような説を記されてゐる。ただし、「年七十三」と、「元寿」の年齢を訂正してゐる。

この日野氏の記述によつてであろうか、上野益三氏も、その著『日本博物学史』(平凡社 昭和四八年)で、「梅園・右田毛利説」を採用された。かつて『明治前日本博物学史 第一巻』(日

本学術振興会 昭和三五年)においては、「文政より天保にわたつて江戸にいた本草家である」と記していただに、日野氏の新説によつて、訂正されたのであろう。『日本博物学史』の五四七頁、一八四四年・弘化元年の欄に、次のように記されてゐる。

元寿、幼名は武之允、長軌といひ、写真斎、写生斎、梅園、華魁舎などと号した。毛利の一門、右田邑主九代房、頼の第二子、文化一二年七月二日生。のち嫡子となり元寿。天保六年、父子間の不和のため廃嫡。著書、ほかに数種あり、植物のほか「魚譜」をもつくる。明治一五年(一八八二)六月二九日没、年六八。墓は萩市法華寺にある。

上野氏のこの著書は、白井光太郎氏の『改訂増補日本博物学年表』(大岡山書店 昭和九年)に代る名著といわれるだけに、その影響は大きい。「梅園・右田毛利説」が公認されるおそれがある。しかし、筆者はこの説が正鵠を得てゐると思われない。むしろ大きな誤りであると信ずる。以下、その疑問点を列挙してみよう。

第一は年齢である。日野氏によると、右田毛利の「毛利元寿」は文化一二年(一八)七月二日の生まれであるといふ。しかし、当館所蔵『梅園草木花譜』の「春ノ部」第一帖の阿部備中守・棕軒(阿部正精・福山城主)の手に成る「題字」は乙酉即ち文政八年(一八)であり、自序も同じ文政八乙酉年である。またこの二四帖の図譜すべてを検すると、花図のそれぞれに著者が自ら写生した年が記されており、それは文政三年(一八)に始まり、嘉永二年(四九)までである。文政八年(一八)には右田毛利の「元寿」は数えて十一歳、文政三年(一八)には六歳である。十一歳

の少年が自著の序を自ら書き、六歳の子供が動植物の精緻な図と解説を書くことができるであろうか。日野氏は

元寿は研究心が強く、また描画にも巧みであった。文政四年（一八二一）頃、即ち七才頃から草木花卉を写し始め、

文政八年（一八二五）十二月にその草木花譜の序を書いている。春夏秋冬に分けて十八帖にまとめたが、これが氏の

十一歳の時である（防長本草学及生物学史二六二—二六三頁）と記しているが、この説明で納得できるであろうか。まして大身とはいえ、陪臣に過ぎない十一歳の少年の著書に、譜代大名阿部備中守正精が自ら題字を書いたであろうか。こうしてみる

と「梅園・右田毛利説」は極めて怪しくなる。
第二は右田毛利の「武之允」が「元寿」と改名した年の問題である。日野氏は前掲の『毛利元寿菌譜』のなかで

天保二年二月二三日に嫡子となり、同年十一月三日に元服、二月一日に鬢髪を剃った。藩主斉元は元の字を与えて、元寿と名づけ、刀を賜った（同書四頁）

と記している。これを『毛利十一代史』（公爵毛利家蔵版 明治四三年刊）によって、その経緯を調べると、巻一〇七「邦憲公記四」の天保二年十月十三日の条に

毛利内匠嫡子武之允首服ヲ加へ偏偉ヲ賜フ

とある。天保二年（一八）に元服して、藩主斉元の一字「元」を賜わって、はじめて「元寿」を名乗ったのであるから、文政八年（一五）に「元寿」の名で自序を記すことはあり得ない。この点で日野氏の「梅園・右田毛利説」が全く成立し難いことが明らかになれたと思う。

第三は居住地と植物採集地の問題である。日野氏は『毛利元寿菌譜』のなかで、天保乙未（六年・三五）から丁酉（八年・三七）にかけ、江戸近郊で菌類の採集に熱を入れていたことを記している（同書一〇—一五頁）。ところがこの天保六—八年のころ、右田毛利の「元寿」は江戸にいたのではなく、国許にいたと見てよい。『毛利十一代史』により、右田毛利父子（内匠・房頭と武之允・元寿）の記事を追うと、巻一〇七「邦憲公記四」の天保元年（一八）三月の条に、毛利藩の役職と土名を、「一江戶方」「一地方」に分けて、一覽にしているが、毛利内匠は「地方」の「御加判」としてその名が掲載されている。国許にいたと見るべきであろう。同年八月三日の条に

同日加判益田播磨城下手当惣奉行ヲ免シ加判毛利内匠ニ後任ヲ命ス

とあり、同年九月五日の条に

毛利内匠城下手当惣奉行ヲ除キ毛利本之助ニ後任ヲ命ス
とあるから、この年は国許にいたと見てよいであろう。翌二年（一八）になると、毛利領内では山口、防府、小郡等に一揆が起こり、藩はその鎮定に躍起となっていたが、同年八月廿八日の条に

鹿背ヶ坂へ毛利内匠出張

とあって、内匠がこの年も国許にいたことが裏付けられる。子の武之允・元寿の元服はこの年の十月十三日であった。この時は藩主斉元も国許にいた。天保二年辛卯正月の条に

公萩城ニ在リ

とあり、参勤交代のため、萩を発駕したのは十一月十日、江戸

に到着したのは十二月十三日であった。武之允・元寿の元服はやはり国許で行われたと見てよい。ついで元寿の廃嫡の経緯を辿ってみると、同じく『毛利十一代史』の巻一〇九「邦憲公記六」の天保五年(三四)正月の条に

此月日不詳差繰之趣アリ毛利内匠之加判役ヲ免ス

差繰之趣トハ家中内匠之指揮ヲ守ルモノト嫡子武之進ノ命ヲ用ルモノト両派トナリ不和ヲ生スルニ基因スルヲ云とあり、同年八月の条には

日不詳毛利内匠家臣不和ノ趣アルニヨリ親族ニ於テ家政合議スヘキヲ内匠ヘ内訓セリ

更に九月の条には

是月公思フ所アリ毛利内匠ニ遠慮ヲ命ス家政紊乱ノ為メ家臣騷擾ノ發生ヲ憂ヒテ

と記され、遂に天保六年(三五)七月の条に

是月毛利内匠嫡子武之九年來多病ノ為メ家續ナシカタキニヨリ廃嫡乞願許可アリ是月毛利内匠近年病弱ニテ出伺モナサス隠居乞願許可跡職ハ毛利藏主二男彝次郎ヲ家嗣トナスヘキ内訓アリ

とあって、武之允即ち元寿の廃嫡がきまったのである。この時に藩主斉元は国許にいたと思われる。その翌月即ち閏七月二十三日、萩城を發駕、江戸へ向かっている。従つて、廃嫡騒動の結末は国許で決められたと見てよい。以上の記述により、内匠(房頭)は天保の頃には国許にいたらしく、武之允(元寿)も国許で元服し、国許で廃嫡されたと思われ、江戸にいた形跡はない。まして廃嫡後は、日野氏の記述のごとく、萩の川上屋敷、

更に平安古川屋敷、松本屋敷と転じたというのであるから、江戸に出たとは思われない。天保六年から八年にかけて、江戸附近で菌類の収集に当たった毛利梅園は、右田毛利の武之允元寿とは別な人物であるとしてよいだろう。

第四は梅園と防長本草家との交友がないことである。日野氏は当時の防長本草家として、高島良台(一八〇四—一八二二)・長野文琢(一八一七生)・日野宗春(一八二七—一九〇九)・茅原定(一七七四—一八四〇)・長松文伸(一八三四—一九〇三)・岡研介(一七九九—一八三九)・井本文恭(一七九五—一八六六)・熊谷五八(一七八九—一八六二)・松永周甫(一八一六—一八八六)等の業績を克明に記されているが、これらの人人と梅園との交渉がない。この点は日野氏も認めており、

松岡家(松岡道遠)に元寿の菌譜が所蔵されていたことか
ら見て、多少の関係はあったかも知れないように思う

と、苦しい解釈をしている(『毛利元寿菌譜』六頁)。

第五は、「梅園・右田毛利説」をとるならば、元寿に晩年の著作がないことになる。前述の通り、右田毛利の武之允元寿は文化二二年(一五)の生まれで、明治二五年(八二)の歿である。しかし、梅園の著作は文政八年(二五)から弘化四年(一七)までで、武之允が十一歳から三十三歳までの間である。武之允が梅園であったならば、その後三十五年間も彼は沈黙を守っていたことになる。廃嫡されたとはいえ、明治四年(七一)に分家した後は自由な生活に戻ったと推察されよう。まして明治政府は科学技術の導入に力を入れ、この方面の人材を必要としていた。梅園ほどの人物が現存しておれば、ほっておかなかったであらうし、

少なくとも著作の一つ二つは発表しているはずである。この点でも日野氏の説では説明が困難である。

以上によって、日野氏の「梅園・右田毛利説」は成立し難く、むしろ「誤り」と断定してもよいと思われる。ただ右田毛利家に幼名武之允、元服後は「元寿」と名乗った人物がいたことは事実であるが、それは本草家の「毛利梅園」ではない。「讃岐」とか「九内」と改名したが、「梅園」「写生齋」「華魁舎」という号を用いたこともない。ただ名家に生まれながら、父子間の争いで二十一歳の若さで廃嫡され、六十八歳で恐らく不幸と思われる一生を閉じた人物に過ぎない。それならば本草家「毛利梅園」はいかなる人物であろうか。日野氏は、その著「毛利元寿菌譜」の九頁で、

右田毛利家の元寿以外に毛利元寿と称する本草学者が他にもいたのではあるまいかという疑問も起り、錦窠翁筵誌に記してあるような幕臣毛利元寿という者の存在も考えられてくるが、毛利元寿と称する人物は右田毛利家の元寿以外にはないように思われる。

と記しているが、「毛利元寿」という人物は、右田毛利のほかにも、実際に存在しており、しかもその人物は、伊藤圭介のいうごとく、「幕臣」であり、三百石取りの歴とした旗本であった。『新寛政重修諸家譜』巻六二九に掲載されている「重政」を始祖とする「毛利家」の系図を追ってゆくと、重政―重次―重長―元教―元智―元甫―元苗と続き、元苗の長子に「元寿」の名が見え、「銀三郎 母は信富が養女」と註が付されている。この「毛利家」は元来、「平氏」で、「森」と称していたが、始祖重

政とその弟の高政が、「豊臣太閤の命により、兄弟おなじく毛利輝元がもとに質たりしとき、輝元が申旨あるにより、太閤の命をうけて大江氏毛利にあらたむといふ。」二代重次は片桐且元に従って大坂城を退き、旗本に加えられた。七代元苗の項には「松三郎 兵橘（中略） 天明元年九月七日遺跡を継。時に十七歳 采地三百石 寛政元年六月七日御小姓組に列し、のち的を射て時服二領を賜ふ」と註が付されている。この元苗の子の「元寿」こそ本草家「毛利梅園」であろう。これを傍証するのが内閣文庫に蔵されている『皇代系譜』という元苗・元寿父子の自筆稿本である。『改訂内閣文庫国書分類目録 上』の「歴史 二 日本史（通史）」のところに、「皇代系譜」として

（皇代年秘録）（稿本）

毛利元苗編 毛利元寿補 写（自筆） 一二冊

と記されている。この書は歴代天皇の系図と、その御事蹟を記した編年体の史書で、第一冊から第一〇冊までは元苗が記して元寿が校し、第一一冊と第一二冊は元寿の著である。その第三冊から第一〇冊までに

梅龍園毛利元寿石瑛重校

とあり、第一一冊には

梅龍園毛利元寿石瑛編著

第一二冊には

撰華園毛利元寿石瑛編著

とある。「梅龍園」は、「梅園草木花譜」春ノ部第四帖の奥付に見える「梅龍園」と同じであり、「撰華園」は、同第一帖巻頭の掾軒阿部備中守の題字「梅園草木撰花画譜」の「撰花」にほか

ならず、いずれも元寿の号であろう。また「石瑛」も、『梅園草木花譜』春ノ部第二帖の目録に、「毛氏江元寿梅園白石瑛輯編」とあり、『梅園魚品図正』の第三帖の目録にも「毛利大江元寿梅園白石瑛撰輯」とある。『皇代系譜』の第二〇冊に

文政十三年五月四日父兵橋元苗遣領元寿江無相違被下置旨
御老中青山下野守殿被付渡

とあり、元寿の家督相続は文政十三年(一八)であることが判明し、更に第一二冊には

嘉永四辛亥年八月七日大江元寿死去三田正覚院葬法名梅園
院善慶道全居士 齡五十四

とあり、元寿梅園が寛政一〇年(九七)の生まれで、嘉永四年(五)に歿したことが判明する。すると、『梅園草木花譜』の「文政八年(一八)」には二十八歳、最初の写生の年「文政三年」には二十三歳で、「梅園・右田毛利説」のような苦しい解釈の必要はない。写生活動が終った嘉永二年己酉(四九)も、歿年の二年前であるから、解釈がつく。『皇代系譜』は所謂「編年体」の史書で、「本草書」ではない。しかし末尾の方に、著者が動植物に興味を持っていることを示す記事がある。弘化三年(四六)十一月二十一日、著者は小林權大夫正篤等五人で、吹上御庭で竹林を拝見、その中に奇竹を見出している。「苦竹マタケ」「女夫竹ヲウツタケ」として、二本の竹が一本のようにくっついて伸び、中途で分れている奇竹の図を記している。その筆の運びは実に巧みである。また文政八年(一八)九月に、両国に駱駝が来たこと、同十年(二七)六月、海豚が両国橋近くに回遊してきたことが記されている。なおこの『皇代系譜』の第一冊の「凡例」の

末尾には

弘化三年丙午十二月 日

毛利大江元寿織記

とあり、第十二冊の本文の記事は、元寿の死後の嘉永五年(五二)六月まで記されている。恐らく元寿の嗣子がしばらく加筆したのであろう。

また『梅園草木花譜』全十七帖の題字を書いた人物を、『新寛政重修諸家譜』によって当たってみると、「冬ノ部」の高木伊勢守(巻三一八・五〇〇石)をはじめ、春ノ部第二帖の高跡部宗左衛門(巻二二六・二六〇石)、夏ノ部第二帖の佐久間平兵衛(巻一三四七・一〇〇俵)、秋ノ部第二帖の大林弥左衛門(巻一四六〇・二〇〇俵)と、「幕臣」たるものが判明する人物がいる。これらの人人は、禄の高下はあったにせよ、いずれも梅園の博物学上の友人であったのである。「右田毛利」の出であるならば、このような人人に題字を依頼することはあり得ない。長州藩関係の人人に依頼したのであろう。

前掲の伊藤文庫の『草木実譜』には、本表紙に赤い紙が張られ、伊藤圭介の字で

旧幕士毛利梅園氏ノ自筆ノ図ニシテ、草木ノ果実ヲ接写シ、
巻尾ニ海藻数種ヲ出ス、精巧真ニ迫ル、参考ニ裨益多シ、
珍玩スベキモノナリ

と記され、その裏には

此表紙ウラノ反古ハ毛利兵衛トアリ

即チ梅園氏ノ家ノ書付ナリ

と同じく圭介独自の字で記されている。圭介は「兵衛」と記し

ているが、あるいは「兵橋」ではあるまいか。「兵橋」はこの毛利家代々の通称である。圭介の生まれは享和三年（一八一三）で、幕臣毛利梅園元寿に遅れること五年、ほぼ同時代の人と言える。

居住地が江戸と名古屋に分かれていたから、交友があったか否かは疑問であるが、ほぼ同時代に生きた本草学者、博物学者として、圭介が梅園の経歴を誤るであろうか。日野氏が「同時代に生活した伊藤圭介すら誤り考えていた」としたことが、かえって「誤り」であったと言えよう。

以上によって、「梅園画譜」の著者毛利梅園は、長州藩毛利家の一族で右田昌主の「毛利武之允元寿」ではなくて、寛政一〇年（一七九七）に生まれ、嘉永四年（一八二一）に歿した三百石取りの旗本「毛利元寿」であったことが明らかにされたと思う。しかし、問題はまだ残されている。「野里梅園」との混同である。佐村八郎氏の『増訂国書解題』の下の二五九六頁には、「梅園魚譜」・「梅園菌譜」・「梅園草木花譜」等の著者を「野里梅園」とし、

野里梅園は通称四郎左衛門、毛利元寿といふ。梅園は其の号なり。大阪の町年寄にして文政天保の頃の人なり。水野忠邦（越前守）梅園奇賞といふ額を書きて贈りし事田鶴舎日記（村田春門日記）に見えたり。夙に博物の研究を嗜みて、梅園奇賞、梅園魚譜、梅園採薬紀行図絵、梅園虫譜、梅園百花画譜等を著す。

と解説している。石田誠太郎編『大阪人物誌』巻四（大阪）石田文庫（昭和二年）にも「野里梅園」の項に、「梅園」として

野里氏、本氏毛利、名は元寿、字は嵩年、通称四郎右衛門、梅園と号す浪華の人常盤町に住す大阪町年寄たり能く物産

学に精通す旁ら古器を愛玩し且つ其鑑定法に長し兼て煎茶の技を嗜む天保頃の人なり

著書 梅園奇賞一 梅園魚譜三 梅園菌譜一 梅園草木花譜二 梅園採薬紀行図譜二 梅園虫譜一 梅園鳥譜一 梅園百花画譜十八 標有梅十

とある。いずれも、幕臣毛利梅園元寿と、大坂町年寄野里四郎左衛門梅園を、混同した結果と思われる。野里家は『浪速叢書』第九「大阪商業史資料」（昭和四年刊）三六二頁によると、寛永三年（一七二六）以来、南組惣年寄を勤める家柄であったらしい。ところが幕臣毛利元寿も、大坂の野里四郎左衛門も、同時代に生きて、「梅園」を号としたために、混同されたのであろう。このためであろうか、岩波書店の『国書総目録』第八巻の「著者索引」では、

毛利梅園（野里一・源一・野一・四郎左衛門・元寿・嵩年）とし、『皇代系譜』等十九の図書を同一著者として扱っている。この十九の図書のうち、どれが幕臣毛利梅園の作で、どれが大坂町年寄野里梅園の著であるかは、現物に当たらなければなるまい。軽々しい断定は避けるべきであらうが、「野里口伝」（『改訂史籍集覧』一六所収）と、「梅園奇賞」（文政十一年刊）の二書は大坂の野里梅園の作と見てよいであらう。また当館白井文庫（白井光太郎旧蔵書）の『魚図』も、「本草関係図書目録」上の六頁では

魚図 毛利梅園画 自筆 一軸

と記されているが、「梅園」の押印が、前掲の「梅園画譜」のそれと異なっており、筆の運びも平凡である。恐らく、「毛利元寿

「梅園」の自筆ではなく、「梅園」を号とする他の人物の作であらう。
 (昭和六〇年二月二一日脱稿)



〈毛利梅園筆「梅園草木花譜」の一部分〉

(付記)
 本稿は、昭和五七年「国立国会図書館所蔵個人文庫展——西
 欧学術の追求——」を開催した際に、当時の鈴木重三司書監を
 中心に、筆者と、青木美恵・村山久江両氏とで、「本草班」を編
 成し、展示会目録の作成に当たった時の副産物である。敢えて
 筆者の名で記したが、正しくは当時の「本草班」四人の共同研
 究の成果というべきであらう。ことに青木美恵氏の御盡力を多
 としたい。

(なかだ・よしのぶ
 元当館専門調査員・
 現就実女子大学教授)